

マタイによる福音書23章37節 「愛する者の悲嘆」

1A 主の悲痛な呼びかけ

1B 神の使者を拒んだ先祖たち

2B 無限の慈しみ

3B 幸せにしたい御心

2A 最善を拒む者たち

1B 正しい者への迫害

2B 荒れ果てた家

3B 悔い改めを待たれる主

本文

マタイによる福音書 23 章を開いてください、私たちは午後礼拝で 23 章を一節ずつ見て行きますが、今朝は 37 節を中心にお話したいと思います。「エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打つ者よ。わたしは何度、めんどりがひなを翼の下に集めるように、おまえの子らを集めようとしたことか。それなのに、おまえたちはそれを望まなかった。」

私たちは、心優しく、柔和なイエス様が、ここマタイ 23 章にて驚くほどの強い非難を浴びせておられる姿を見ることとなります。「災いだ」と八回、パリサイ人と律法学者に宣言されています。私たちは、普段から気短で怒りやすい人が強く非難するのであれば、「ああ、またやっているよ」と気にかけないかもしれませんが、いつも自制があり、柔和であられる時に、強く非難される時には、よほどのことがない限り、そうならないだろうと思い、耳を傾けるでしょう。そうイエス様は、長いこと忍耐してこられた父なる神を示しておられました、その神の忍耐がユダヤ人指導者の拒絶によって、一時的に途絶えることを教えておられます。しかし、その「災いだ」「忌まわしいものよ」という非難には、第一印象とは裏腹に、ご自身を拒む者たちを愛してやまない心の表れであることを知ります。それが、この箇所です。何度となく、雌鷄が雛を翼の下に集めようとしておられる姿に例えておられるのです。

ところで、イエス様が強く非難される基準が、私たち人間とは異なります。この人はとんでもない罪人だと思われる人々に対して、イエス様は慈しみを示されました。姦淫の現場で捕らえられた女について、石打ちをしようとしている者たちに対しては、「ヨハネ 8:7 あなたがたの中で罪のない者が、まずこの人に石を投げなさい。」と言われました。そして誰もいなくなると、11 節、「わたしもあなたにさばきを下さない。行きなさい。これからは、決して罪を犯してはなりません。」と言われました。同じように、五人の夫を持ち、今は結婚もしておらず同棲状態のサマリヤの女に対して、イエス様は罪に定められませんでした。彼女の隠された生活は語られましたが、むしろ、「わたしから

生ける水を飲みなさい」という語りかけによって、優しく接してくださいました。

イエス様は、しかしパリサイ人や律法学者に対しては、しばしば強く非難をされ、ここ 23 章では、ここまで非難をされるのかと思われるほど徹底的なのです。その理由は、「自分の正しさを主張している」ということでしょう。自分の義を立てようとしている、と言えるでしょう。

牧者チャック・スミスが、しばしば「愛が最も大切なものである」ということを話す時に、こんな話をします。「間違っただけで、正しい姿勢を持っている人と、正しいことをしていると思っていて、間違っただけで、正しい姿勢を持っている人がいます。後者のほうが、前者よりもはるかに問題がある。」ということです。間違っただけで、正しいことをしている人が、「それは、やってはいけないよ」と言えば、「ああ、そうだったのですか。このことは正します。」と言えます、これが正しい姿勢です。けれども、正しいことを行っているように見える人に、「これは間違っているのでは？」と問いかけると、一話したら十が返って来るような反発だけが返って来ます。心の姿勢というのが、どんなに大切かを知ります。私たちはとかく、外の行いに気を使うのですが、それは正しい心を持っていれば後で直すことができるのです。もっと大切なのは、その正しい心を持っているかどうかであり、私たちはいつの間にか、心が頑なになり、自分が正しいと思い込んで、それで直されようとする激しく反発してしまうのです。これが、ここで起こっている問題です。福音に敵対するのは、自分を正しいとする自己義認にあります。

1A 主の悲痛な呼びかけ

1B 神の使者を拒んだ先祖たち

イエス様は初めに、「エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打つ者よ。」とされています。イエス様は先の譬えの中に、彼らに対して既に話しておられた、ぶどう園の農夫たちのものがありました。主人が、収穫を得るためのしもべを何度となく遣わしたのに、「農夫たちはそのしもべたちを捕えて、一人を打ちたたき、一人を殺し、一人を石打ちにした。(23:35)」これが、エルサレムの姿だということです。

イエス様は、二度、「エルサレム、エルサレム」とされています。そしてそこにある宮には、主の名がとこしえに置かれているとあります。初めての神殿を建てたソロモンに、こう言われました。「I 列王 9:3 あなたがわたしの前で願った祈りと願いをわたしは聞いた。わたしは、あなたがわたしの名をとこしえに置くために建てたこの宮を聖別した。わたしの目と心は、いつもそこにある。」しかし、主がここまでしてご自分のものとし、愛し、選ばれたエルサレム、ご自分の目と心がいつもそこにあるエルサレムで、ご自分の預言者や遣わされた者たちを、その住民たちが石で打って行った、という流血の歴史がしみ込んでいます。この繰り返しが、悲痛の声そのものです。その心の頑なさや悪があったとしても、エルサレムに対する永久の愛を捨てることのできない泣き叫びと言ってもよいでしょう。

イエス様は、ユダヤ人のある人々からエレミヤではないか？と言われていましたが、エレミヤ書に同じ叫びが数多く書かれています。「2:29-30 なぜ、あなたがたはわたしと争うのか。あなたがたはみな、わたしに背いてきた。——【主】のことば—— わたしはあなたがたの子らを打ったが、無駄だった。彼らはその懲らしめを受け入れなかった。あなたがたの剣は、食い滅ぼす獅子のように、あなたがたの預言者たちを食い尽くした。」エレミヤは、このような預言のゆえに、エルサレムの祭司や預言者によって迫害を受け、一度、穴の中に入れられて死にかけたこともあります。そして同じように彼らの頑なさを指摘されたイエス様は、これから、十字架に付けられるようになります。

2B 無限の慈しみ

私たちは、エレミヤの時代におけるエルサレムの姿、そしてイエス様がここで強く非難しておられるエルサレムの姿を見るにつけ、どうして神はイスラエルを愛して、この国民を立てたのか？と不思議になることがあるかもしれません。前回のメッセージでもお話ししましたが、どうして神は、私たちが読んで理解できず、躓いてしまうような奇妙な、不思議なことばかりを書き残させるようにさせたのか？という疑問にもつながります。神に愛された都が、神ご自身をここまで執拗に拒む姿は見るに絶えません。そして、そのことをあからさまにそのまま記録しているのですから、「これでは、神を信じようとする人がいなくなるのではないか？」と思うかもしれません。今のエルサレムとて、少し似ているかもしれませんね。クリスチャンからも尋ねられますが、何かにつけ紛争の多いイスラエルやエルサレムに、なぜそんな熱い情熱を傾けるのですか？聖地旅行に行こうとするのですか？と尋ねる人たちもいます。

それは、自分自身を見れば簡単に分かります。全く同じ理由で、神は自分を、愛をもって選んでくださったということです。どんなに背いても、それでもご自身の愛を捨てることはできない、そういった憐れみに押し流されて出て来る神の選びによって、自分が今、キリスト者なのだということです。「このあわれみの器として、神は私たちを、ユダヤ人の中からだけでなく、異邦人の中からも召してくださったのです。(ローマ 9:24)」とパウロは言いました。神は、私たちに何か良いものがあるから、選んでくださったのでしょうか？いいえ、むしろ悪いものがあるから、神に人に憎まれるものが多くあるにもかかわらず、神が一方向的に愛してやまないから、選ばれているのです。

まずイスラエルが選ばれた理由を見てみましょう、「申 7:6-8 あなたは、あなたの神、【主】の聖なる民だからである。あなたの神、【主】は地の面のあらゆる民の中からあなたを選んで、ご自分の宝の民とされた。【主】があなたがたを慕い、あなたがたを選ばれたのは、あなたがたがどの民よりも数が多かったからではない。事実あなたがたは、あらゆる民のうちで最も数が少なかった。しかし、【主】があなたがたを愛されたから、またあなたがたの父祖たちに誓った誓いを守られたから、【主】は力強い御手をもってあなたがたを導き出し、奴隷の家から、エジプトの王ファラオの手からあなたを贖い出されたのである。」主がただ愛し慕っているから、イスラエルは選ばれました。ですから、彼らがどんなに不忠実でも、主は真実だということです。

この選びが、キリストにあって異邦人にも届けられたのです。ちょっと長くなりますが、テトスへの手紙3章3節から7節を読みます、「私たちが以前は、愚かで、不従順で、迷っていた者であり、いろいろな欲望と快樂の奴隷になり、悪意とねたみのうちに生活し、人から憎まれ、互いに憎み合う者でした。しかし、私たちの救い主である神のいつくしみと人に対する愛が現れたとき、神は、私たちが行った義のわざによってではなく、ご自分のあわれみによって、聖霊による再生と刷新の洗いをもって、私たちを救ってくださいました。神はこの聖霊を、私たちの救い主イエス・キリストによって、私たちに豊かに注いでくださったのです。それは、私たちがキリストの恵みによって義と認められ、永遠のいのちの望みを抱く相続人となるためでした。」そして、テモテ第二 2 章 13 節には、「私たちが真実でなくても、キリストは常に真実である。ご自分を否むことはできないからである。」とあります。

3B 幸せにしたい御心

そして、主がいつも、ご自分が選ばれた者たちに良くしてあげたい、幸せにしてあげたいと願っていることに気づく必要があります。イエス様が、「**わたしは何度、めんどりがひなを翼の下に集めるように、おまえの子らを集めようとしたことか。**」と言われました。雌鶏は、何かこれは危険だと思ったら、すぐにその羽を逆立てして、そこに雛が逃げてきます。もう外からは雛がそこにいることが見えなくなるほどです。そして守られているだけでなく、母親の体の近くにおいて、その暖かさを感じることができ、慰められます。私たちが交読文で読んだ詩篇の箇所、翼の下に隠れる者たちの姿が描かれていました。「91:4-9 主はご自分の羽であなたをおおいあなたはその翼の下に身を避ける。主の真実は大盾また砦。あなたは恐れない。夜襲の恐怖も屋に飛び来る矢も。暗闇に忍び寄る疫病も真昼に荒らす滅びをも。千人があなたの傍らに万人があなたの右に倒れてもそれはあなたには近づかない。あなたはただそれを目にし悪者への報いを見るだけである。それはわが避け所【主】をいと高き方をあなたが自分の住まいとしたからである。」今、読んだように、雌鶏が雛を翼の下に集めるといのは、まさに悪いものから自分たちを守っておられる姿であります。主がいつも願われているのは、そのようにご自分の翼の下に隠れて、私たちが近くにおいてほしいと願われているのです。

主が、どうしてご自分の命令を守れと言われるのか？「あなたの幸せのため」と申命記 10 章に書いてあります。「10:12-13 イスラエルよ。今、あなたの神、【主】が、あなたに求めておられることは何か。それは、ただあなたの神、【主】を恐れ、主のすべての道に歩み、主を愛し、心を尽くし、いのちを尽くしてあなたの神、【主】に仕え、あなたの幸せのために私が今日あなたに命じる、【主】の命令と掟を守ることである。」主が願われているのは、私たちの最善です。ですから、主に争うということは、自分の最善と争うことに他なりません。もちろん、私たちは子どもの時に親が自分に言いつけることが、それが自分にとって最善であると思える時は、むしろ少ないでしょう。けれども成長すれば、確かにその通りだと分かります。それと同じで、主が命じておられることは私たちに理解できなくとも、最善を願って言われているのだということを信じていなければいけません。

2A 最善を拒む者たち

ところが、彼らはそれを望みませんでした。イエス様は、「**それなのに、おまえたちはそれを望まなかった。**」と言われます。預言者たちが預言していた時代は、周りに敵がやって来ていた時です。北イスラエルはアッシリア、南ユダはバビロンがやってきていました。その時に、神はご自身のところに民を集めようとしておられました。そのために、預言者を遣わされました。それなのに、言うことを聞かなかったのは彼らです。

1B 正しい者への迫害

これが歴史を通じて、起こっていたことです。イエス様は、なんと創世記から歴代誌第二の出来事までをまとめて、歴史の中でずっと、神を信じ、神の言葉に立っていた者たちを、人々が迫害し、殺していったことを指摘しておられます。手前の34-35節を見てください、「だから、見よ、わたしは預言者、知者、律法学者を遣わすが、おまえたちはそのうちのある者を殺し、十字架につけ、またある者を会堂でむち打ち、町から町へと迫害して回る。それは、義人アベルの血から、神殿と祭壇の間でおまえたちが殺した、バラキヤの子ザカリヤの血まで、地上で流される正しい人の血が、すべておまえたちに降りかかるようになるためだ。」アベルは、創世記4章に出て来る人物、アダムとエバの弟息子です。彼がカインに殺されて、そして歴代誌第二24章21節に、ザカリヤが石で打ち殺されている場面が出てきますが、ユダヤ人の聖書は今の私たちのと違って、歴代誌が最後に来ています。マラキ書ではなく、歴代誌が最後です。ですから、彼らの聖書の初めから終わりまで、正しい者を殺したのはまさに、自分たちの先祖であり、そして自分たちもその過ちを繰り返そうとしている、ということです。

そのことを考える時、私は、「御霊に従うこと、肉に従うこと」を思います。覚えていますか、アブラハムは自分の肉の努力でイシュマエルを生みました。エジプト人ハガルによって生みました。けれども、サラによって約束の子イサクを生みました。イサクの乳離れの祝いの時に、兄イシュマエルがイサクをからかいました。それでサラが、母ハガルもイシュマエルも追い出してください、どちらも相続すべきではない、と話しました。その話から、パウロは、「肉によって生まれた者が、御霊によって生まれた者を迫害したように、今もそのとおりになっています。(ガラテヤ 4:29)」とあるのです。同じ肉の兄弟なのに、御霊に導かれようとするとは反対なのです。

イスラエル旅行でガイドの方が、興味深いことを言われました。「時に教派間の争いのほうが、熾烈になることがある。」キリスト教の外から反対を受けることよりも、他の教派からの反対のほうが熾烈だということです。ベツレヘムでのパレスチナ人のクリスチャンのガイドの方も言っていました。ムスリムからの迫害はありますか？と尋ねると、「そんなことはない、共存している。」とのことですが、「ギリシア正教の家族や親戚からの圧力や反対が、辛い」とのことでした。伝統的、習慣的にキリスト教徒なのですが、福音に目覚め、イエス様と個人的な関係を持つと、ムスリムよりも、同じキリスト教徒からの反対が熾烈だということです。同じユダヤ人なのに、神に従おうとするユダ

ヤ人を迫害し、殺してしまうことさえするのは、そうした「身近にいる人が御霊によって生きるのに、そのつもりがない、肉のまま構わないと思っている人々が、その人の信仰をやめさせようとする。」ということです。

2B 荒れ果てた家

そしてイエス様は、「38 見よ。おまえたちの家は、荒れ果てたまま見捨てられる。」と言われました。紀元 70 年に、ローマによってエルサレムの町と神殿が破壊されました。神がなんとかして救おうとして、人々を遣わし、最後はご自分の御子をも遣わしたのに、その救いの御手を拒んだので、見捨てられてしまうということです。人が悔い改めない時に、そのように懲らしめの中に置かざるをえなくなるということがあります。その人が、自分の罪の結果をそのまま受けなければ、その罪を憎むことができなくなってしまいます。バビロンに捕え移されたユダヤ人たちは、その悲惨な出来事を経験して、ようやく偶像礼拝がいかに苦々しいものかを悟り、帰還後は偶像礼拝を自分たちの中に持ち込まなかったことから良く分かります。

3B 悔い改めを待たれる主

しかし、そこで大事なのは、それでも神の愛、神の慈しみは尽きていないということです。その悲惨な出来事の中にさえ、神の憤りの中にさえ、実は神の熱情というか、燃える愛、悲しみの涙があるのです。エレミヤは、哀歌を書きました。エルサレムは滅び、荒れ果ててしまっている姿を見て、体が壊れそうになるくらい泣いている姿があります。それこそが、神の涙です。神ご自身の悲しみをもって、エレミヤが悲しんでいたのです。

しかしその熱情は、その頑なにしている人々がついに、主に立ち返るところまで続きます。39 節でイエス様がこう言われています。「わたしはおまえたちに言う。今から後、『祝福あれ、主の御名によって来られる方に』とおまえたちが言う時が来るまで、決しておまえたちがわたしを見ることはない。」ということは、裏を返せば、イエス様を見る時には、彼らも群衆と同じように「祝福あれ、主の御名によって来られる方に」と言っているようになっている、ということです。終わりの日には、大患難時代が来ます。それは、ヤコブの苦難ともエレミヤ書で呼ばれており、ユダヤ人の人たちがかつてない患難を受けるけれども、ついには救われることが預言されているものです。ユダヤ人に対する神の取り扱いを見ると、本当に驚くことがあります。なぜホロコーストが起こるのを神は許されたのか？そこには愛がある、などと言ったら怒られるかもしれませんが、今のような文脈で、神は愛しているからとすることができるでしょう。

神は同じように、私たちが悔い改めることができるようにするために、そのように何かに明け渡すということが起こります。自分が惨めな思いになって我に返って、それで主ご自身に戻ることができるようにしてくださるのです。